

別紙① 戦争体験証言者候補と体験談の概要

※個人情報保護のため、戦争体験証言者候補名・体験談の聞き取り調査票は、本業務の契約業者のみに公開します。また、戦争体験証言者は、あくまで候補であり、体験者の健康状態などにより、体験者や制作内容に変更が生じることがあります。

【証言 1】『満蒙開拓青少年義勇隊からシベリア抑留まで』

証言者 A さん（男性・大津市）、大正 14 年（1925 年）生まれ

体験談の概要：

大正 14 年生まれの A さんは、尋常高等小学校高等科を卒業したのち 15 歳の時に満蒙開拓青少年義勇隊に入所し満州へ渡りました。年上の義勇隊が召集されていき、代わりに A さんが班長を務めました。A さんは、昭和 19 年に徴兵検査を受け、現地・満州で編成された部隊に入隊したのち、ハルビンで終戦を迎えました。部隊は海林に集められ、「ヤポン、ダモイ（日本人、帰国）」と告げられましたが、ソ連に抑留されました。

A さんは、半年間の入院期間を経て、元日本軍兵士らとともに、夏は鉄道工場、冬は伐採作業に従事させられました。極寒と飢えの中で、カラマツの皮を煮て飢えをしのいだこともあり。昭和 22 年 7 月、永祿丸にて帰国、母が出迎えてくれました。

資 料：体験談の聞き取り調査票、図書『第三次 義勇隊大蒙開拓史』（昭和 52 年発行）

制作意図：満蒙開拓団青少年義勇隊とソ連抑留の体験談を後世につたえる

盛り込む内容：①満蒙開拓団青少年義勇隊の体験

②陸軍入隊と終戦後のソ連抑留生活の体験

【証言 2】『戦時中の学生—中学校から専門学校への進学と勤労動員』

証言者 B さん（男性・東近江市）、昭和 2 年（1927 年）生まれ

体験談の概要：

B さんは、八日市中学校に入学した 16 歳の時に、太平洋戦争がはじまりました。開戦後は、英語は習えなくなりました。八日市中学校を 4 年で繰り上げ卒業となる B さんは、京都薬科専門学校を受験します。当時の理科系の学校では、徴兵延期の適用があったため、多くの学生が受験したといえます。

昭和 19 年、B さんは京都薬科専門学校へ進学し、京都での下宿生活が始まりましたが、食料がなく毎日お腹を空かせていたといえます。勤労動員では、大阪の神崎川近くにある藤沢薬品の工場へ行くことになりました。そこは止血剤を製造する工場でした。昭和 20 年、大阪の空にアメリカ軍機 B-29 が飛来し、藤沢薬品の工場を爆撃していききました。

資 料：調査票

制作意図：戦時下の中等学校の学校生活と勤労動員

盛り込む内容：①戦争によって変化する学校生活（英語の禁止、繰り上げ卒業）

②終戦時の大阪の軍需工場と勤労動員

【証言 3】『朝鮮で生まれ育って』

証言者Cさん（女性・竜王町）、昭和2年（1927年）生まれ

体験談の概要：

Cさんは、父が東開拓民として渡った朝鮮半島の慶山（慶尚道）で生まれました。日中戦争の時は、Cさんの父は出征しましたが、残された家族は、朝鮮で暮らす人々と交流しながら、穏やかな生活を送っていました。

Cさんが、馬山の女学校在学時に、太平洋戦争がはじまりました。授業は、竹やり訓練やモールス符号の授業や看護・救護活動があり、学校生活でも戦争の影響を受けました。

昭和20年、女学校を卒業したCさんは、慶州の駅の出札係として勤め、そこで終戦を迎えました。終戦になると、ソ連軍の攻撃が始まり、慶州へ逃げ込む人々がいました。昭和20年10月、Cさんは混乱の中、釜山から出港し帰国しました。

資 料：体験談の聞き取り調査。

制作意図：戦中から戦後にかけての朝鮮で暮らした日本人の生活と引き揚げ

盛り込む内容：①戦時下の朝鮮半島での暮らし

②戦後の混乱と引き揚げ

【証言 4】『東洋レーヨンに落ちた模擬原爆』

証言者Dさん（男性・大津市） 昭和4年（1929年）生まれ

体験談の概要：

昭和20年7月24日の朝、大津市内の学校に通うDさんは、学徒勤労動員として、同級生と一緒に大津市にある東洋レーヨン工場に向かっていた。同じ頃、飛来してきたB29が一発の爆弾を東洋レーヨン石山工場に落としました。それは、原子爆弾の投下訓練に使用されていた模擬原爆でした。

工場の入口近くの林にいたDさんは、アメリカ軍機が去った後の工場へ向かうと、悲惨な状況が広がっていました。工場の周辺は、怪我をして血を流す人がいて、混乱した様子でした。Dさんらが作業していた部屋は、爆弾によって破壊されました。また、Dさんがお世話になった学友が行方不明になり、それは即死を意味していました。

資 料：調査票。東洋レーヨン石山工場が所有する被爆状況資料。

制作意図：昭和20年7月24日に大津市の軍需工場に落とされた模擬原爆

盛り込む内容：①勤労動員された学生と軍需工場となった東洋レーヨン石山工場

②昭和20年7月24日の東レの空襲

【証言 5】『戦時中の女学生』

証言者 E さん（女性・大津市） 昭和 3 年（1928 年）生まれ

体験談の概要：

天台寺門宗総本山の園城寺の長女として生まれた E さんの学生の青春は、戦争一色の時代でした。昭和 15 年に滋賀県立大津高等女学校に入学、太平洋戦争がはじまった年に、英語の授業がなくなりました。放課後は庭球部（テニス部）の練習をすることもありましたが、勤労働員として近くの稲刈りの手伝いにも行きました。E さんは、戦時下の学校生活に対して、息苦しさを感じるようになりました。昭和 19 年、京都女子高等専門学校に進学しましたが、嵐山の軍需工場へ勤労働員されるようになりました。「戦争だから、働かなしょうがない」と思うようになりました。

資 料：調査票。「湖と生きる」『湖国と文化』191 号（2025. 4. 1 発行）

制作意図：戦時下の女学生の学校生活と勤労働員

盛り込む内容：①大津高等女学校での学校生活

②軍需工場での勤労働員と空襲

【証言 6】『縁故疎開で東近江市へ』

証言者 F さん（男性・東近江市） 昭和 11 年（1936 年）生まれ

体験談の概要：

昭和 11 年生まれ F さんは、神戸で生まれ育ちました。太平洋戦争がはじまり、日本の都市部が空襲に襲われる危機が高まっていました。F さんは、祖父の故郷・東近江市へ縁故疎開をしました。疎開先でも、学校のグラウンドでサツマイモやカボチャを植えて、食糧難を乗り切ろうとしていました。通学用の運動靴の配給も行き届かなくなり、藁草履を履くようになりました。文房具もなく、習字は新聞紙を使っていました。

昭和 20 年 7 月のある朝、F さんは、上空で日本軍とアメリカ軍の空中戦を目撃しました。戦争はすぐそこまで来ていました。

資 料：新聞記事。

制作意図：戦時下の暮らしの様子と戦争を身近に感じる出来事（日米軍機の空中戦）

盛り込む内容：①子どもの生活をとおして戦争中の食糧難、物不足の様子

②東近江市でおこった空中戦とアメリカ軍機の墜落